

目的 胴部の近似体表を作図によって得ることができれば、体形の数量化における作図との関連の確認、胴部原型に意図的にゆりみを加えてゆく短寸式原型作図法への応用、更にカバー率を予測できる胴部原型作図法等が考えられる。これらを目的として体形を数量化しこれを用いる展開方法を検討した。被験者は前面・後面に分け青年女子(平均年令19.3才)各々50名、老年女子(平均年令69.5才)各々50名とし、手法を確認した。前報では背面について報告したが、今回は頸付根囲線における形態的特徴を胴部原型の衿ぐり曲線の視点から考察した。

方法 体表採取は1979年～1982年の5・6月である。計測点・計測線をサインペン・ネックチェーン・ボディラインで印し、体表実長をマルチン式計測器の他、試作したネックゲージを用いて前面17項目、後面30項目を計測した。これを用いて作図し、不織布により直接体表にあて確認した。

結果 ①各計測点間の体表実長を求めることにより、正確、且容易に衿ぐり曲線、肩傾斜、前後ダーツ量を含む単純化した近似体表を得ることができた。②原型における衿ぐり曲線を描くための必要不可欠な計測項目は前後の頸中・頸丈及び案内値(仮定)の6項目である。③頸付根囲の形態特徴の実態をこれら6項目の他、小池氏分析の前頸部くり、後頸部くりを用いて報告する。④青年と老年の形態特徴を比較すれば有意差が認められない頸付根周径に対し青年は後頸中が著しい有意差で大きい。老年は前頸丈が顕著に大となり、前後頸中は小となる。周径は同じ計測値を示すが形の上では大きな変化を認めた。